

四つの獣

狐を選ばせるために、榊原直哉が最初にしたことは、狐の魅力を語ることはなかった。

彼が先に潰したのは、この会議が「皆で愛らしい動物を選ぶ場」になりかねない空気そのものだった。

獣性形質選考準備会の三回目。机上の候補一覧には、まだ二十種を超える動物が残っていた。犬、猫、狐、兎、パンダ、レッサーパンダ、カンガルー、タヌキ、フェレット、ミーアキャット、ビーバー。そのほかにも、知名度、文化的親和性、身体的特徴のいずれかを理由に候補へ滑り込んだ種が並んでいる。

榊原は手元の資料を閉じ、発言を求めた。

「確認しておきたいのですが、我々が選定しているのはマスコットではありません。今後、実際に人間の身体へ発現し、その形質を持ったまま一生を送るものです。社会的受容性とは別に、発現後の種別認識性を独立した評価項目として置くべきだと思います」

反論はなかった。むしろ数名の委員が頷き、評価項目案を担当していた者が端末へ何かを書き込んだ。

榊原はそこで口を閉じた。

狐はその条件に強い、とは言わなかった。耳や尾の限られた発現だけでも識別しやすいなどと説明する必要もない。ここで狐の名を出せば、提案そのものが狐のためのものと警戒される。

狐に有利であることと、その評価軸が合理的であることは両立する。

ならば、後者だけを通せばいい。

数週間後、「無説明下種別認識率」は正式な評価指標の一つになった。

その夜、榊原は自宅の冷蔵庫から安い缶ビールを一本取り出し、一人で開けた。まだ一票も得ていないし、候補が一つ落ちたわけでもない。

ただ、盤面の地形を一つ変えた。

彼にとって、勝つための準備とはそういうものだった。

当時三十二歳だった榊原の本職は遺伝子工学だったが、学生時代には民俗学も専攻していた。大学院以降は遺伝子工学へ軸足を移したものの、文化表象に関する研究会へ顔を出し続け、宗教史から漫画、映像作品、仮想キャラクター文化まで節操なく資料を漁っていた。

狐が好きだった。

そのことを隠してはいない。

ただ、彼が惹かれていたのは動物としての外見だけではなく、人間が長い歴史の中で狐へ与えてきた曖昧な位置づけの方だった。

神の使いであり、怪異であり、盗人であり、隣人であり、ときには守護者でもある。人間の生活圏のすぐ近くに現れながら、完全には人間の側へ取り込まれない。犬が家の中へ入り込み、猫が人間の膝を奪ったあとにも、狐は境界のあたりに残った。

その距離を、榊原は美しいと思っていた。

だからこそ、獣人計画へ導入する候補種を問われたとき、最初に狐を思い浮かべた自分自身を信用しなかった。

結論が先にあるのなら、まずその結論を壊してみるべきだ。

榊原は狐を採用する資料より先に、狐を落とすための資料を作った。

犬科であり、すでに有力候補である犬と近すぎる。地域によっては害獣として扱われ、狡猾、不吉、疾病媒介といった負の印象もある。尾は生活上の障害になりうる。耳介形状の変更には聴覚への影響評価が必要になる。自分が好む「神秘性」など、政策上の採用理由にはならない。

三週間かけて反対理由を並べ、さらに一か月を使って一つずつ検証した。

犬と同じ犬科であることと、視覚的な認識が重複することは別問題だった。文化的な負の連想は確かに存在するが、地域別調査では致命的な拒絶へ直結していない。尾については長さ、毛量、可動範囲ごとの生活負荷を試算し、耳についても既存の形態モデルから安全域を詰めた。

民俗的な象徴性は主たる採用理由から外した。ただし、複数文化圏にまたがって「人と人ならざるものの境界」に置かれてきたという特性は、補助的な文化価値として残した。

最後に榊原は、自分で作った反対意見一覧の末尾へ一行だけ加えた。

——それでも狐を採用する合理性は残る。

そこで初めて、自分を狐派だと認めた。

犬と猫については、最初から他の候補とは扱いが違った。

「猫を外した場合の国民向け説明文を作れる方はいらっしゃいますか」

ある委員が冗談めかして言ったことがある。

「犬もでしょう。獣人を作ると言っても犬も猫もない方が説明に困る」

会議室に笑いが起こったが、内容そのものは冗談ではなかった。

社会的受容性という点で、犬猫は圧倒的だった。人類との共生期間、日常生活への浸透度、創作文化での露出、幼児期からの親和性。どの数字を見ても強い。

何より、人間の子供に獣の耳や尾が現れる未来を説明されたとき、多くの人間が最初に想像するのが犬か猫だった。

そこまで来れば、採用しない理由の方が必要になる。

事実上、本当の選考は残る二枠をめぐって行われた。

カンガルーは比較的長く残った。世界的な知名度があり、外形的特徴も分かりやすい。長い耳、太い尾、特徴的な後肢、そして有袋類という独自性もある。

問題は、その有袋類としての最大の特徴だった。

「育児嚢は実装しません」

生体設計分科会の主任が言った。

「技術的に不可能ということですか」

「今回の設計範囲では扱いません。皮膚だけの問題ではありませんから。筋層、乳腺、腹部構造まで含めた再設計が必要になります。獣化因子による外形形質の付加という前提から外れます」

榊原は説明を聞きながら、心の中で候補名に線を引いた。

彼らが作ろうとしていたものは、人間を別の動物へ変える技術ではない。

顔立ちは人間のまま。

骨格も人間のまま。

耳、尾、体毛。必要であれば特徴的な色素。

それが全部だった。

発現量には個体差があると考えられていたし、設計された形質が必ずすべて同時に現れるとも想定されていなかった。むしろ耳だけ、尾だけ、あるいは耳とわずかな体毛といった部分的発現の方が現実的だと見積もられていた。

人間の身体へ、獣の形質をいくつか加える。

それ以上ではない。

「では、袋のないカンガルーになる？」

誰かが言った。

「雄には元々ありませんが」

別の委員が返した。

「そういう話をしているんじゃない」

笑いは起こらなかった。

カンガルーは、その週に脱落した。

ミーアキャットとフェレットは、無説明下種別認識試験で苦戦した。

ミーアキャット、三十四パーセント。

フェレット、四十一パーセント。

人間の顔立ちをそのまま維持し、限られた耳や尾、局所的な体毛だけを加えた場合、思っていた以上に見分けがつかなかった。

試験画像を見た委員の一人が首を傾げた。

「……イタチ？」

「フェレットです」

「今、回答を見たから分かるんです」

ミーアキャットを推していた委員が榊原を見た。

お前が作った評価基準だ、と言いたげな目だった。

その通りだった。

ただし、試験自体は公平に設計している。同じ発現範囲、同じ体格、同じ服装、同じ背景、同じ撮影条件。候補によって有利なポーズを取らせることも、特徴を誇張することもしていない。

その公平さこそが狐に有利だった。

「説明なしで種を判別できないことが、そこまで重大でしょうか。本人の人格には関係ない」

「人格にはありません」

榊原は答えた。

「ただ、我々は今、どの動物由来の形質を人類へ導入するかを決めています。何を導入したのか説明されなければ分からない形質へ、限られた一枠を使うのであれば、それ相応の理由が必要です」

正論だった。

そして榊原はこの仕事を通じて、正論というものは言われた側だけでなく、言った側にもわずかな苦味を残すのだと知った。

ビーバーの場合、問題は外見と生態のどちらに「ビーバーらしさ」があるかだった。

「尾があります」

担当委員は言った。

「あります」

「切歯も特徴的です」

「歯牙形質の大規模な変更は避けます。咬合への影響が大きすぎる」

「なら、尾を中心にすればいい」

「その場合、なぜビーバーでなければならないのでしょうか」

発言した瞬間、榊原自身、少し踏み込みすぎたと思った。

担当委員は黙り、やがて資料を閉じた。

「あなたは、ビーバーをダムを作る動物としてしか見ていない」

「そうは言っていません」

「一般人が感じるビーバーらしさの中心は生態だ、と言いたいんでしょう」

「はい」

相手はしばらく榊原を見てから息を吐いた。

「……それは否定しません」

ビーバーの魅力の多くは、川を堰き、森林と水辺を変え、自ら生存環境を構築するその生態にあった。

獣人計画は、それを人間へ移植するものではない。

尾だけを持たせてビーバーと呼ぶ理由は、他候補より弱かった。

タヌキは、もっと厄介だった。

榊原が日本人であるだけに、その扱いを雑にはできない。

「知名度不足という評価自体が、かなり文化圏依存ではありませんか」

東アジア文化圏を担当する委員が言った。

「狐だって文化によって意味は違うでしょう」

「文化的意味は違います。ただ、動物そのものの認知率には差があります」

「その認知率調査、英語圏での画像検索量を補助指標に使っていますよね」

「補助です。主要指標ではありません」

「補助でも入れている」

榊原は黙った。

そこは相手が正しかった。

世界標準と呼ばれる数字には、ときに世界人口そのものではなく、情報発信量の大きい文化圏の影が落ちる。日本では説明不要のタヌキが、世界全体では狐ほど知られていない。その差を一つの数字へ押し込んでよいのか。

「では、文化圏別の数字をそのまま出しましょう」

榊原が言うと、相手は眉を上げた。

「総合値を廃止する？」

「必要なら」

「狐に不利になりますよ」

「構いません」

それは本心だった。

狐が勝てる地形は作る。

だが秤そのものを狐だけに合わせて歪めてしまえば、勝ったところで意味がない。

再集計の結果、狐は落ちなかった。タヌキもすぐには落ちなかったが、世界規模での認知差はなお残った。

最終的にタヌキ派が撤退したあと、担当委員が廊下ですれ違いざまに言った。

「あなた、もっと嫌な奴だと思ってました」

「どういう意味です」

「自分に不利な再集計まで本当にやるとは思わなかった」

「狐が負けるなら、狐が悪いんですよ」

「そういうところが嫌な奴なんです」

今度は二人とも笑った。

パンダは別の意味で強かった。

彼らが想定する発現範囲では、パンダは意外なほどパンダに見えない。丸い耳だけでは弱く、特徴的な白黒模様を出すために体毛と色素の発現範囲を広げれば、それだけ設計の複雑性が増す。

だが、社会的受容性となると圧倒的だった。

「好かれる必要すらないんです」

パンダ派の代表は言った。

「嫌われにくい。それだけで非常に大きな意味があります」

獣化因子は、生まれてくる本人が選べるものではない。その形質を持って生まれた子供が社会から拒絶されにくいことは、単なる人気投票ではなく計画の倫理そのものに関わる。

榊原もパンダを軽視してはいなかった。

ただ、彼らが想定する発現では、パンダはあまりにもパンダでなかった。

もっとも手強かったのはレッサーパンダだった。

耳。

尾。

毛色。

高い親和性。

タヌキより高い世界的知名度。

何より、狐と同じ評価軸で戦える。

「体毛と色素の発現範囲を広げれば、かなり強いですね」

同僚が言った。

「広げればね」

「そこを抑えにいく？」

「安全基準を狐の都合で抑えるみたいに言うな」

「違うの？」

榊原は答えなかった。

本会議の二か月前、体毛と色素発現の上限を決める技術分科会が開かれた。

榊原は十二本の論文と三種類のシミュレーションを持ち込んだ。

広範な体毛発現は見た目だけの問題ではない。毛包分布、皮膚代謝、色素細胞の制御機構を複雑化し、長期安定性の評価項目も増える。獣化因子が出生後も維持される以上、不要な複雑性は避けるべきであり、種別の識別性は可能な限り耳、尾、限定的な体毛で成立させることが望ましい。

主張は全部正しかった。

安全側の判断でもあった。

そして、狐に有利だった。

「ずいぶん準備しましたね」

会議後、レッサーパンダ派の委員が言った。

「仕事ですから」

「これ、いつから？」

「半年くらい前です」

相手は呆れたように笑った。

「あなた、本当に狐が好きなんですね」

「ええ」

「結論が先じゃないですか」

「先でしたよ」

榊原はあっさり認めた。

「だから間違っていないか、誰より調べました」

相手はしばらく彼の顔を見ていたが、やがて笑った。

「それ、反則ですよ」

「ルールの範囲です」

「だから反則なんです」

本会議の日、最終候補として残っていたのは犬、猫、狐、兎、パンダ、レッサーパンダ、タヌキだった。

犬猫はほぼ確定。

残る二枠を巡って、各派が最後の資料を持ち込んでいる。

楕円形の卓上には、各候補の発現予測モデルが投影されていた。

そのモデルでさえ、一人の人間にすべての特徴が揃っているわけではなかった。

狐型の一例には耳と尾。

別の例には耳と前腕の体毛。

別の例には尾とわずかな毛色変化。

設計した形質がすべて一人へ揃って現れるとは考えられていなかったからである。

榊原は狐型モデルを眺めた。

人間の顔。

人間の身体。

そこに大きすぎない三角耳があり、腰の後ろにはほどほどの長さの尾がある。

それだけでも狐だと分かる。

人間の姿をほとんど崩さないまま、確かに狐という印象が成立している。

榊原はそこに、人類が長く創作の中で試行錯誤してきたものの蓄積を見ていた。漫画、アニメーション、ゲーム、仮想配信者、広告、民俗画。人間の形を保ったまま、最低限の記号によって動物を認識させる実験を、人類は無自覚に何百年も繰り返してきた。

「創作物を根拠に持ち込むことには、やはり抵抗があります」

年長の委員が言った。

榊原には想定済みの質問だった。

「創作物を生物学的根拠として扱っているわけではありません。人間がどの特徴を見て何の動物だと認識するか、その認知傾向を調べる資料として使っています」

「娯楽でしょう」

「娯楽であることと、認知データとして無価値であることは同義ではありません」

榊原は資料を開いた。

「百年以上、数億件規模で蓄積された視覚表現事例を、創作だからという理由だけで捨てる方が、私は非科学的だと思います」

委員長が小さく笑った。

「榊原委員、それも事前に用意した答えですか」

「似た質問は想定していました」

「いつから？」

「三か月ほど前です」

会議室に笑いが起きた。

最後まで競ったのは、狐、兎、レッサーパンダだった。

そして榊原にとって少々皮肉なことに、兎をそこまで押し上げた最大の要因は、彼自身が正式評価へ押し込んだ種別認識性だった。

長い耳だけで一目で分かる。

広範な体毛も複雑な色素発現も要らない。

犬猫とも狐とも重複せず、社会的受容性も高い。

休憩中、レッサーパンダ派の委員がコーヒーを手に近づいてきた。

「これ、あなたのせいですよ」

「何がです」

「兎。認識率を正式評価にしたから」

「公平な評価だと思います」

「狐のために作ったんでしょう」

「狐に有利だとは思っていました」

「兎にも有利だった」

「そうですね」

「困ってます？」

榊原は少し考えた。

「かなり」

相手は吹き出した。

「安心しました。ちゃんと人間だったんですね」

榊原も笑った。

自分が作ったルールに、自分自身も拘束される。

当然だった。

ルールというのは、本来そういうものだ。

最終投票の前に、各候補について短い意見表明が許された。

パンダ派は社会的受容性を訴えた。レッサーパンダ派は、受容性と識別性を高い水準で両立できることを訴えた。兎派は、身体設計の単純さと圧倒的な認識率を強調した。

榊原は最後だった。

用意してきた原稿を表示し、しばらく眺めたあと、閉じた。

「狐について、神秘的だとか、美しいだとか、文化的に豊かな象徴を持つとか、そういう話をするつもりでした」

何人かが顔を上げた。

「ですが、それらは私が狐を好む理由にはなっても、人類の将来へ組み込む理由としては弱い」

卓上に狐型のモデルが浮かんでいる。

「私たちが設計している獣化因子は、人間を獣へ変えるものではありません。人間の身体を基礎に、限定された形質を加えるものです。耳、尾、体毛。しかも、そのすべてが一人へ揃って出るとは限らない。それが前提です」

誰も反論しなかった。

「なら、その限られた発現の中でなお、その動物だと分かる種を選ぶべきです」

榊原は狐型モデルを見た。

「狐は成立します」

それだけ言って座った。

用意していた原稿には、あと千二百字あった。

採決結果が表示された。

犬。

猫。

兎。

狐。

レッサーパンダとの差は、わずかだった。

勝った。

結果を見た瞬間に榊原の頭へ浮かんたのは、歴史的責任でも、人類の未来でもなかった。

ただ、その一語だった。

半年以上準備した。相手より多く調べた。狐が有利になる評価軸を、狐以外にも説明できる正当な形で組み込んだ。反対意見を自分で作り、質問を予測し、不利な再集計にも応じた。

それでも狐は残った。

だから嬉しかった。

廊下へ出ると、レッサーパンダ派の委員が壁にもたれて待っていた。

「おめでとうございます」

「ありがとうございます」

「負けたなあ」

「僅差でした」

「僅差でも負けは負けです」

彼女は手を差し出した。

榊原は握った。

「いい狐にしてください」

「私が作るわけではありませんよ」

「似たようなものでしょう」

「違います」

榊原はすぐに答えた。

そのときは、本当にそう思っていた。

数年後、最初の子供たちが生まれた。

獣化因子は、おおむね設計どおりに発現した。

狐耳だけの子供。

尾だけの子供。

耳と尾を持つが、体毛はほとんど人間と変わらない子供。

耳と局所的な体毛が現れ、尾のない子供。

三つの主要形質——耳、尾、体毛——が一人へすべて揃う例はなかった。

当時、それを奇妙だと思った者はいない。

発現には個体差がある。

それだけの話だった。

後世の研究者は、この世代の表現型をまとめて「弱獣性」と呼ぶようになる。

だが榊原たちにとって、それは弱くなどなかった。

それが、獣化因子の正常な発現だった。

第二世代になって、少し様子が変わった。

榊原は、その最初期の一人を覚えていた。

狐耳がある。

尾がある。

肩から腕、背中の一部にかけて、はっきりと狐らしい体毛と毛色が出ている。

耳や尾そのものの大きさは、第一世代の子供たちとほとんど変わらない。ただ形状がきれいだった。耳の輪郭も、尾の毛並みも、種としての特徴がよく出ていた。

「きれいに全部出ましたね」

研究室で誰かが言った。

榊原も同意した。

設計してある形質が、たまたま一人へ揃った。

そう考えれば、何もおかしくない。

それを危険な兆候だと思った者はいなかった。

後世、それは最初期の「中獣性」と分類された。

さらに世代が進んだ。

耳と尾と体毛が揃った子供は、珍しくはあっても前例のない存在ではなくなった。

それでも、まだ説明はできた。

発現率の組み合わせ。

遺伝的再構成。

潜性形質の顕在化。

研究者は既存の言葉を使って、起きていることを説明しようとした。

そしてある時期から、その説明だけでは足りない子供が現れ始めた。

耳が、大きい。

尾も、明らかに豊かだった。

体毛の範囲が広い。

前腕や肩だけではなく、頬、首、背中、脚へと連続し、なかには全身を短い獣毛が覆う例さえあった。

しかし、奇妙なのは発現量の多さだけではなかった。

大きな耳も、豊かな尾も、身体から浮いて見えない。

不釣り合いに巨大な器官が後付けされたようには見えず、毛流れや輪郭まで含めて、最初からその身体を構成する一部であったかのように馴染んでいる。

それでも人間だった。

顔立ちは人間のまま。

マズルが伸びるわけではない。

頭蓋が狐のものへ変わるわけでもない。

手足も、立ち姿も、人間の基本構造を外れない。

獣へ近づいているのではなかった。

人間のまま、獣性だけが異様なほど濃く、自然に身体へ馴染んでいた。

後世の研究者は、それを「強獣性」と呼んだ。

榊原は、その言葉が好きになれなかった。

強いも弱いもない。

獣化因子に、自分自身を強化する機構など組み込んでいない。

誰が強くした。

私たちはしていない。

その苛立ちは、老いてなお消えなかった。

強獣性が確認されてから、まだそれほど長い年月は経っていなかった。最初期の子供たちは、まだ幼い。

発生機序についてはいくつもの仮説が提案されているが、榊原の目には、どれも「説明できないものへ名前を与えた」段階から大きく進んでいないように見えた。

すでに第一線を退いて久しい自分にできることなど、ほとんどない。

そう思っていたところへ、獣人計画初期選考関係者と現行研究部門との意見交換会への招待が届いた。

一度は断ろうとした。

最新の遺伝子工学について語れることは少ない。百年以上前の候補選定について尋ねられても、古い資料以上のものが出てくとは思えない。

しかし案内文の末尾に、

——当日は、狐型強獣性発現児および保護者との面会を予定しています。

と書かれていた。

榊原は、出席に丸をつけた。

面会当日、榊原は予定より少し早く施設へ到着した。

若い職員に案内され、昔とはまるで違う研究棟の廊下を歩いている途中だった。

前方の角から、子供の声がした。

「こっち？」

「違う違う。待って、走らないよ」

女性の声が追う。

榊原は何気なく顔を上げた。

角から、まず尾が現れた。

大きかった。

幼い子供の身体に対して、明らかに昔の発現予測モデルより太く、長く、毛量も多い。

次に小さな身体が現れた。

四歳ほどだろうか。片手に水筒を持ち、もう片方の手には何か小さな玩具を握っている。

頭には、大きな狐耳があった。

榊原は足を止めた。

狐だった。

いや。

人間の子供だった。

丸い頬。

小さな鼻。

母親から少し先へ行きすぎて、振り返ったときの幼い表情。

どこから見ても人間の子供である。

ただ、全身へ狐が馴染んでいた。

大きな耳は、昔のモデルのように頭の上へ「付いている」のではない。髪や側頭部の毛並みと自然に連続し、その子の頭部の輪郭そのものを作っている。

頬から首へ短い獣毛が続き、袖口から覗く手首にも同じ毛が見える。尾は豊かだったが、奇妙なほど大きく見えなかった。その子の小さな身体の一部として、そこにあることが当然に思える。

身体の構造は人間だった。

顔も人間。

手足も人間。

それなのに、榊原がかつて耳と尾と局所的な体毛だけを見て「狐は成立する」と言った、その狐という形質が、比較にならないほど濃く存在している。

異物感がなかった。

それが何より衝撃だった。

研究者だった頃の思考が反射的に動き始める。耳の大きさ、毛量、尾の比率、体毛分布、色素発現――。

途中で榊原は、自分自身を止めた。

違う。

診察ではない。

目の前にいるのは症例ではない。

子供だ。

「先生？」

案内していた職員が不思議そうに榊原を見た。

母親もこちらへ気づいたらしい。

「あ……もしかして、榊原先生ですか」

「はい」

返事が少し遅れた。

母親は子供の肩に手を置き、苦笑した。

「すみません。先に会っちゃいましたね」

「いえ、こちらこそ」

子供は母親と榊原を交互に見た。

「だれ？」

「あとで会う予定だった先生」

「なんの？」

母親が困った。

職員が助け舟を出した。

「ずっと昔にね、狐のことをいっぱい調べた先生」

子供は榊原をじっと見た。

「きつね好き？」

榊原は思わず笑った。

「好きだよ」

すると子供は、少し嬉しそうに言った。

「ぼくも」

それだけ言うと、水筒の紐がねじれていることの方へ興味を戻した。

榊原だけが、その二文字をしばらく受け止めきれなかった。

正式な面会は、そのあと予定どおり行われた。

母親と子供が並んで座り、担当研究者が健康状態や日常生活上の配慮について説明した。

本人は健康だった。

服には尾を通すための構造が必要になる。耳が大きいので帽子にも工夫がいる。全身の体毛は季節によって密度が多少変わり、手入れには専用のブラシを使っているらしい。

「この子、ブラッシング好きなんです」

母親が言うと、子供が横から訂正した。

「おなかはやだ」

「お腹だけ嫌がります」

研究者が笑った。

榊原も笑った。

あまりにも日常的だった。

その日常性が、かえって胸に刺さった。

しばらくして、研究者が参考資料として昔の発現予測モデルを表示した。

人間の幼児。

小さな狐耳。

細めの尾。

腕の一部に、わずかな体毛。

当時としては十分に「狐型」とされた姿である。

子供が画面を見た。

次に、自分の大きな尾を見た。

もう一度画面へ戻る。

「これ、きつね？」

「そう」

榊原が答えた。

「昔はね、こういうふうになると思ってたんだ」

子供はしばらく見比べた。

「しっぽ、ちっちゃい」

「そうだね」

「みみもちっちゃい」

「そうだね」

今度は腕を指差した。

「け、すくないね」

榊原は少し笑った。

「うん。昔は、そのくらいだと思っていたんだ」

「なんで？」

「それ以上になる仕組みが、ないと思ってたから」

子供は意味が分からなかったらしく、母親を見る。

母親も説明に困っていた。

「昔の人はね、そう思ってたんだって」

「ふーん」

それだけだった。

数秒後には、子供は端末の端に表示されていた別の画像へ興味を移していた。

榊原は、その切り替えの速さに救われるような気持ちになった。

母親との話の中で、昔の選考会議について尋ねられた。

「先生が狐を選んだんですか」

「私一人ではありません。ただ、かなり強く推した側ではあります」

「どうして狐だったんです？」

榊原は少し考えた。

「少ない特徴でも狐だと分かったからです」

母親が古いモデルを見る。

「これで？」

「これで、です」

榊原は苦笑した。

「当時は、耳、尾、体毛が全部一人へ揃うことすら、一般的な発現とは考えていませんでした。第一世代の子供たちは実際そうだった。耳だけの子、尾だけの子、二つ出る子。その程度です」

「じゃあ、この子みたいになるって分かってたら？」

いつか聞かれると思っていた質問だった。

それでも、この子の母親から直接問われると、準備していた言葉はほとんど役に立たなかった。

「最初から全部やり直していたと思います」

「狐を選ばなかった？」

「分かりません」

榊原は誤魔化さなかった。

「カンガルーは、育児嚢を再現できないから落ちました。ビーバーは、外見だけでは特徴が弱いと判断した。ミークァットやフェレットも、耳や局所的な体毛だけでは見分けにくかった。それが落選理由の一つだった」

目の前で、子供が自分の大きな尾を抱えるようにして椅子に座っている。

「もし当時から、形質がここまで強く出て、それでも人間の身体へ自然に馴染むと分かっていたなら、評価は全く違っていただいでしょう。パンダも、レッサーパンダも、タヌキも、もっと別の見え方をしたはずです。狐が残った保証はありません」

「じゃあ、間違いだったんですか」

榊原はすぐには答えなかった。

工学者としてなら、設計外の現象が起きたことを失敗と呼ぶのは難しくない。発生機序不明。予測不能。世代を重ねるにつれて発現量と形質統合度が変化する。

計画として、そんなものを成功と呼ぶことはできない。

だが、その「失敗」の先に、一人の四歳児がいる。

「少なくとも、私たちの予測は間違っていました」

榊原は答えた。

「でも、この子が間違いだという意味ではありません」

母親はしばらく榊原を見てから、静かに頷いた。

面会が終わり、帰る準備を始めたころ、母親が子供へ言った。

「この先生ね、ずっと昔に狐を残すのを頑張った人なんだって」

榊原は慌てた。

「いや、そういう説明をすると少し——」

子供はもうこちらを見ていた。

「きつね、いなくなるところだったの？」

「そういうわけじゃないよ」

「じゃあなに？」

四歳児に獣性形質選考制度を説明する方法を、榊原は半年かけても思いつかなかっただろう。

「いろんな動物の中から、四つだけ選んだんだ」

「きつね、はいった？」

「入ったよ」

「よかったね」

子供は笑った。

榊原も笑った。

「そうだね」

それで話は終わった。

帰り際、子供は母親と手を繋いで廊下を歩いていった。

大きな狐耳が人の声へ反応して時折向きを変え、豊かな尾がゆっくり揺れている。そのどちらも、奇妙なほどその小さな身体に馴染んでいた。

途中、壁に展示されていた何かが気になったらしく急に足を止め、母親に手を引かれてまた歩き始める。

ただの親子だった。

榊原は、その後ろ姿を見送った。

若い頃の自分なら何と思っただろう。

きっと感動した。

自分が民話や絵や創作物の中に見ていた、人と狐の境界が現実になったと、無邪気に喜んだかもしれない。

今の榊原も感動していた。

否定することはできない。

こんな姿になるとは思っていなかった。

耳と尾と体毛。

その三つのうちいくつかが人間の身体へ現れる。

それだけのつもりだった。

それが世代を越え、すべて揃い、やがて大きくなり、全身へ広がり、それでも奇形的に浮き上がることなく、一人の人間の身体として自然に馴染んでいる。

あの日、資料の中で思い描いた「獣人」がそこにいた。

想定とは、まるで違う形で。

誇らしかった。

恐ろしかった。

申し訳なくもあった。

そして感動していた。

そのどれか一つが正しければ、ほかが消えるような感情ではなかった。

かつて榊原は、狐が境界にいるから美しいのだと思っていた。

人と獣。

此岸と彼岸。

現実と物語。

その間に立ち、どちらにも完全には属さないもの。

しかし今になって思えば、境界とは初めから世界のどこかに引かれている線ではなかったのかもしれない。

人間が線を引く。

その上に誰かが生まれる。

食べ、眠り、遊び、母親に手を引かれ、廊下を歩いていく。

そうして日常が始まったとき、初めてその線は現実になる。

あの日、自分は勝ったと思った。

狐を四つのうちの一つへ押し込んだ。

レッサーパンダに勝った。

パンダに勝った。

タヌキに勝った。

選考という意味では、それで正しい。

けれど実際に自分たちが選んでいたのは、動物の順位ではなかった。

まだ生まれていない人間が、どんな姿になりうるのか。

その方向を四つ、選んでいた。

そして自分たちが決めた方向の先には、誰一人想像していなかった場所まで道が続いていた。

廊下の角へ消える直前、子供の大きな尾だけが最後まで見えていた。

やがて、それも見えなくなった。

榊原は一人で立ち尽くし、しばらくしてから小さく笑った。

「……ずいぶん、狐だったな」

若い頃なら、それはただの褒め言葉だった。

今ではもう、それだけではなかった。